

是枝洋小伝

——回想に代えて

二村 一夫

はじめに

是枝洋さんが、2021年11月23日に急逝されました。享年91歳。地域の合唱団で歌っていた時に倒れて入院、6日後に亡くなられたとのこと。ご冥福を祈ります。

是枝さんは、1965年9月、財団法人法政大学大原社会問題研究所に図書係として入職されました。専門職の司書として蔵書の整理をすすめ、さらにはパソコン草創期からPCによる図書・資料のデータベースを構築し、研究所の業務全体のデジタル化に貢献されました。1992年の退職後も、嘱託として、またリプロ電子工房を設立して、大原研究所の文献データベースの充実に寄与されました。研究所の歴史において、重要な役割を担われた方ですが、「縁の下の力持ち」に終始されたので、今のままでは、忘れ去られてしまうおそれがあります。この度、彼を追憶する機会を与えられたのを機に、私自身、あまり詳しく知ることのない是枝洋の生涯を探り、記録に留めておきたいと思います。回想というより、個人史探究ともいべき「研究」的論考ですので、以下、敬称抜きで記します。

生い立ち

是枝洋は、自らについて、黙して語らない人でした。しかし、母・幸子の伝記に、その遺文と遺作の短歌、さらには近親者の追憶を加えた『夢風光』と題する本を出しています。また夫人・英子の自伝草稿に加筆し、さらに彼女の10数年に及ぶアルツハイマー型認知症との闘病を記録した『かわらぬ心をいだいて』も刊行しています。この2冊の書物には、断片的ながら是枝洋のことも記されています。まずは、この2冊を手がかりに、その生い立ちを探ってみようと思います。

是枝洋は、1930（昭和5）年8月18日、是枝規矩哉・幸子夫妻の次男として、兵庫県印南郡曾根町（現在は高砂市）に生まれました。2歳年上の兄・峻と、2歳年下の弟・迪規との3人兄弟ですが、弟は夭逝しています。父の是枝規矩哉は、1902（明治35）年元日の生まれ、出身地は、鹿児島県日置郡伊集院町猪鹿倉でした。規矩哉の生家は貧しく、彼は高等小学校を卒業するとすぐ、叔父を頼って朝鮮京城へと渡り、朝鮮銀行の給仕として働きながら夜間の商業学校で学びました。数年後に帰国し、朝鮮銀行大阪支店に勤務しつつ苦学し、1926年に関西大学専門部商業学科を卒業しています。卒業後も、弁護士をめざして勉強していました。

母の幸子は、旧姓葛野（かどの）、1904年7月16日、兵庫県川辺郡加茂村（現在は川西市）の常忍寺で生まれています。幸子の母・春枝は、幸子が生まれる前に夫と離別し、幸子3歳の時に再婚、以後、幸子は、祖母・行方（ゆくえ）の手で育てられました。

規矩哉と幸子が出会ったのは、幸子の母方の伯父・葛野枯骨が兵庫県曾根に設立した「曾根学生ホーム」でした。規矩哉はこのホームに下宿しており、幸子はそこで働いていたのです。2人はすぐ熱烈な恋に落ち、双方の家の反対を押し切って、1928（昭和3）年1月に結婚しました。しかし、その結婚生活は6年余の短期間で終わりました。1933（昭和8）年、規矩哉が結核に罹患し、翌1934年10月、32歳の若さで亡くなったからです。規矩哉の死により、是枝家の生活は一変しました。銀行員の安定した収入がなくなり、幼児2人と曾祖母・行方の一家4人を、幸子が女手一つで支えざるを得なくなったのです。幸子は、大阪府立梅田女学校を卒業、さらに府立大手前女学校高等科を卒業しています。当時の女性としては、かなりの高学歴です。しかし彼女が得た仕事は、兵庫県加古郡荒井村（現・高砂市）母の会が開設した保育園の保母でした。月収30円ほどだったようです。当時の小学校教員の初任給が50円前後でしたから、家計の苦しさは容易に想像されます。それでも、幸子は、1941（昭和16）年に、大阪府大手前臨時教員養成所で学び、小学校教諭の資格をとり、大阪府池田小学校に就職しました。保育園保母よりはかなりの収入増となりました。ただ、幸子は長男の峻だけを連れて池田市で下宿生活を送り、洋は大阪府三島郡戸伏（現茨木市）の光照寺で、曾祖母の行方と暮らしました。行方は嘉永5（1852）年の生まれですから、すでに90歳前後、「寡黙な人だった」と洋は回想しています（『夢 風 光』104頁）。洋も寡黙な人でしたが、それには幼少期の家庭環境も少なからず影響したのではないかと推測されます。

1943（昭和18）年、小学校を卒業した洋は、大阪府立池田中学校に入学します。しかし太平洋戦争ただ中で、勤労働員に駆り出され、池田市のダイハツ工業で、ロケットエンジンの部品作りに追われる日々でした。その上、母の幸子が、敗戦前年の1944年に栄養失調のため心臓脚気を患い、翌年、退職を余儀なくされました。1945年暮、母と兄は、亡夫・規矩哉の父の勧めで、鹿児島伊集院町に移住しました。1946年には、洋も、経済的困難から池田中学3年で中途退学に追い込まれ、彼もまた鹿児島に移り、農事試験場の農夫として働きながら、自学自習の生活を送りました。1948年1月には専門学校入学資格検定試験を、同年11月には新制大学入学資格認定試験を受けて、ともに合格しています。上級学校進学の高い希望をもっていたことは明らかで、1949年4月に、慶應義塾大学文学部哲学科通信教育課程に入学しています。

1951年、是枝洋は大阪府の公務員試験に合格し、大阪府労働部失業保険課で働き始めます。しかし、あまり楽しい職場ではなかったため、3年足らず働いただけで、1954年3月に退職しました。その翌月には、東京上野の文部省図書館職員養成所（2年制）に入学し、司書への道を歩き始めました。なぜ司書職を選んだのかは、彼から直接聞いています。

「私は公共図書館員を志して養成所にはいったのですが、それまで図書館を利用するにあたってさまざまな障壁にぶちあたってきました。小学校3年生のときに母が大阪府立図書館につれていってくれたのですが、4年生以上でないと利用できないといわれて入館できませんでした。規則ですからといわれるとなにもいえなかったのです。母がこの子が利用したいといっています

ねんと残念そうにつぶやいたことを覚えています。私は通信教育で大学にはいったので、図書館がいわば私の大学だったので。そこで様々な制限にあったことから図書館をもっと利用しやすい開かれたものにならなければいけないと思ったことが図書館員を志したひとつの動機でした」(2019年3月10日、二村宛メール)。

図書館職員養成所が、授業料無料の上級学校だったことも、ここを選んだ理由の一つだったでしょう。同期生40数人の1人が、妻となる岩田英子でした。2人の出会いについて、彼は「英子自伝への補足と修正」のなかで、次のように記しています。

たまたま同時に養成所に入ったのはなんという偶然だったろうか。父親がいなくて苦勞しながら認定試験を受けて養成所に入ったこと、一旦社会に出てから図書館を志して入学したという共通点から、お互いに関心をもつようになり、よく話をするようになった。その頃は喫茶店などに行く金はないので、上野公園のベンチに腰掛けて夜まで話したこともある。靴磨きの少年がきて靴を磨かせろというので困っていると、彼女が靴をみがくお金がないのよとやさしくいきかせてくれた。すると少年はちえっというながら去っていった。そんなこともあった。

最終的に結婚を決めたのは八月頃だったか。英子は鳥取に帰郷して親の了解をえた。結婚しないといって東京に出た娘が半年もたたないうちに結婚するといったのだから、さぞ驚いたことであろう。しかし、リベラルな母親は英子を信頼してくれたのだった。海のものとも山のものともわからぬ、在学中の若者と結婚するというのだから、親があやぶむのも当然で、世の中が安定した頃だったらとうてい認められなかったにちがいない。十一月に英子はその頃住んでいた池袋の要町から、私は足立区の亀有から白金猿町に引っ越した。猿町のおばさんは下町風の気っ風の良人で、面接に行ったときに、いどこですといったら、にやっと笑った。訳ありの二人と知っていながら下宿させてくれた。二人暮らしは初めてなので、なにも知らない私たちにいろいろ教えてくれた。ふとんを干すということもそのときはじめて知ったくらいである。

まるで若い二人の「同棲生活」のような新婚家庭でした。

毎日放送東京支社でアルバイト

図書館職員養成所の2年生になった1955年、英子は、毎日放送東京支社制作部レコード室のアルバイトとして働き始めました。洋も、翌年、養成所を卒業後、希望していた公共図書館への就職が叶わなかったため、同じ職場で働き始めました。2人の仕事は、番組制作スタッフの要求に応じて、番組BGMにふさわしい音楽を探し出すことでした。そこで彼らは、在庫レコードを聴いては、そのイメージに「雄壯、可憐、悲劇的」などの件名を付し、楽器や演奏形式なども記録したカードを作り、「件名標目表」も作成しています。

1960年、洋は、営業部への配転の話が出たのを機に毎日放送を退職し、友人の紹介で、木内信

胤が理事長として采配をふるっていた世界経済調査会に就職しました。しかし、ここも5年ほどで、退職に追い込まれました。その理由を、ご本人は「家風にあわないから辞めよ」と、言われたからだと言っています。

法政大学大原社会問題研究所に就職

是枝洋に、退職勧告をした世界経済調査会の大江庶務課長は、同時に、「学界の人事部長」の異名をもつ、杉本俊朗横浜国立大学教授を紹介してくれました。杉本氏は大原研究所の宇佐美誠次郎理事と東大経済学部のゼミ仲間で、その繋がりから、大原研究所の図書係ポストが空いていることを知ったのでしょう。前任の永田利雄が、1965年3月に退職したばかりでした。同年夏、是枝洋は研究所の面接を受け、9月に採用されました。実は、是枝洋と法政大学の縁は、就職7年余も前からでした。1958年4月、彼は慶應の通信教育をやめ、法政大学通信教育部経済学部に入学していたのです。さらに3年後の1961年には、経済学部第二部（夜間）に編入学し、1963年に卒業したばかりでした。

図書係としての初仕事は、「所蔵文献目録」の作成でした。入所4年半後の1969年2月は研究所創立50周年で、これを記念する事業の一つが、所蔵図書総目録の作成でした。研究所が戦後に入手した図書は、すでにカード化されていました。しかし、戦前収集され、戦災に焼け残った図書は、新宿区柏木の土蔵に置かれたままでした。問題は、大学院5階の研究所が、総計156平方メートルしかなく、整理すべき図書を配架するに十分な広さがなかったことです。そのため、柏木の土蔵から、少部数、運んではカードをとり、戻しては次を運ぶという手間のかかるやり方で整理は続けられました。この作業は、図書係だけでは50周年に間に合わないということで、専任研究員も土蔵に通い、カード取りをすることになりました。しかし、司書の素養のない研究員が作成したカードは、本のサイズやページ数を欠いた不完全なもので、最終的には、すべて是枝洋がチェックして補完したのでした。研究員のカードが不完全であることに、是枝は、早くから気づいていた筈です。しかし、彼はそれを注意することなく、黙って手直したのでした。ともあれ、研究所創立50周年記念の1969年2月に、『法政大学大原社会問題研究所所蔵文献目録（戦前の部）』は刊行されました。冒頭に、「この目録はおおむね日本目録規則1965年版によって編成した」と記されていることに、本書が是枝洋作品であることが明示されています。

研究所の活動を妨げていたスペースの狭さは、1967年2月に大きく改善されました。法政大学麻布校舎の一部を借りて、大原社会問題研究所麻布分室が設置されたからです。この麻布校舎は、財団法人協調会が経営していた東京工業専修学校のために建てられた鉄筋コンクリート4階建、延べ床面積800坪の建物です。戦後は、協調会の後身・財団法人中央労働学園が経営する中央労働学院大学の校舎でした。同校が1951年9月に法政大学と合併、社会学部の母体となったことで、法政大学の所有に帰したのです。一時は、工学部や、第一工業高校の校舎でしたが、1964年に工学部が移転し、翌65年に第一工業高校が第二工業高校と合併して、空き校舎となっていたのです。

図書の分類整理

麻布分室の開設によって、蔵書を一箇所に集めることができ、ようやく図書分類カードの作成も本格的に始まりました。その基礎となる分類表は、それ以前、1966年11月に完成しています。つまり『所蔵文献目録』の作成準備と並行して、分類表の作成も進められていました。分類表については、是枝本人が次のように語っています。

「分類表は私が原案を作成しました。もちろん分類表をつくれという指示は所長からであったと思います。戦前の大原の分類は簡単すぎるということではなかったでしょうか。

公開されている研究所として、分類は一般的なものが望ましい、となると、NDCですが、大原の蔵書構成からみてNDCには不満がありました。いろいろな分類法もみましたが、結局、NDCを基礎に大原用に作り直すという方針で作成しました。LCの分類表など、やはり、日本人にはわかりにくいと思いました。その他の分類も日本人にはなじみのないものなので、実用には問題がありました。職員、研究員、常務理事をふくむ所員全体の会議で、何度か議論を重ねて1966年11月にできあがりました。私がいって1年ちょっとの頃ですから、入所後割に早い段階で分類表作成の話がでたようです。

分類表の概略は80年史にちょっと紹介されています。労働問題を4類として、関連分野の著作を集めたことや（NDCでは経営にはいつている賃金管理や、社会にある社会保障など）、マルクス、エンゲルスの著作を主題ではなく、分類表の上で集中したことなどが特徴です。労働問題の分類は、大原が編集していた労働年鑑の構成を反映したものとなっています。年鑑では労働者状態、労働運動、労働政策という柱をたてていましたから、分類もそれを反映しています。

その頃はそれほど深刻に考えなかったのですが、一館だけの特殊分類は、維持管理も自前でやらねばなりません。分類表が作成当時の思想状況や、蔵書構成、収集方針を反映していたので、時代の変化とともに、改訂が必要となります。私はやめる前からこの分類表の改訂が必要であると考えていましたが、結局大改訂はできないままに退職しました。」（森田俊雄「大原社会問題研究所資料の研究（2）」『大阪城南女子短期大学研究紀要』第50巻，2016-03-25，<http://doi.org/10.15043/00000059>）

図書・資料の一般公開

麻布分室の開設により、図書・資料の整理は順調に進み、1971（昭和46）年4月から、週2回、一般に公開することになりました。さらに1973年からは閲覧日を週5日に増やしました。閲覧開始に先だち、研究所が「利用者の資格を問わない」との方針を決めたことは、その後の研究所の性格を決める上でも、重要な「事件」でした。しかし、この方針を決めた所員会議は、少し揉めました。実は、私を含め研究員は、閲覧を研究者に限るべきだと考え、利用者に所属機関の紹介状を持

参させることを考えていました。閲覧者のなかには、貴重な資料にインクでチェックをする人もいたほどで、資料保存のためには、必要な制限だと考えたのです。しかし、この会合で、いつもはあまり発言しない是枝洋は、無条件での一般公開を強く主張し、最終的には、われわれが説得され、無条件一般公開の方針が決まったのでした。

1970年代、是枝は、大学院棟の研究所と麻布分室の二重勤務になり、分類カード・図書ラベル作成、添付、配架など、地味で根気の要る作業を続けました。もちろん、カードや図書ラベルの作成は、彼だけでなく他の図書係職員や、時には大学院生のアルバイトも参加しましたが、図書の分類は、司書で、かつ英語・ドイツ語・ロシア語もできる是枝ひとりの仕事でした。この時期の大きな出来事は、1973年の社会労働問題研究センターの発足でした。私学助成の拡大によって、学校法人法政大学の教職員は経常費助成の対象となったのですが、財団法人大原研究所の所員は、助成の対象となりませんでした。この解決策として、大学直属の社会労働問題研究センターを設立し、大原社研の所員は、全員がこれに所属し、研究所は兼務となったのです。なお、これに伴い、旧協調会蔵書が、法政大学図書館からセンターの管理となり、大原蔵書と統一的に運用されるようになりました。

あいつぐ図書の大移動

1981年3月、大原研究所は市ヶ谷キャンパスに新設された図書館棟に移転しました。書庫はこの80年館の地下2階と地下3階にあり、所蔵図書・資料の大半を収蔵することができました。しかし、その僅か5年後の1986年3月、研究所は、またもや移転します。今回は多摩キャンパスの図書館研究所棟です。総計2,200平方メートルの面積で、この広さが、再度の移転を決断させた大きな理由でした。多摩移転と同時に、向坂逸郎氏の旧蔵図書資料7万冊も受け入れました。麻布から80年館、さらには多摩キャンパスへと、あいつぐ移転で、一番の大仕事は、図書の運搬でした。もちろん、業者に委託しましたが、その段取りを決めたのは、図書係・是枝洋と資料係・大野善実です。いま思い返せば、1970年代末から86年代半ばまで、是枝洋は図書の移動に明け暮れたのでした。

こうした雑務に追われる日々のなかで、是枝洋は、大原研究所から退職することを、本気で考え始めました。転職したいのは「母親から受け継いだ放浪癖」のせいだ、と彼は説明しました。しかし実際は、研究所の業務が、彼に司書としての専門性を発揮させず、その向上心を満足させていないためと分かりました。そこで私は、彼に「日本労働運動史参考文献案内」（歴史科学評議会編『歴史科学への道』上、校倉書房、1976年）の分担執筆を依頼し、さらに労働運動史研究会の機関誌に「労働運動史文献目録・1978年」の作成を頼みました。この「労働運動史文献目録」の1979年以降は、研究所の機関誌『研究資料月報』に連載するようになります。また、1982年から1988年まで、《経済資料協議会》の事務局長に就任したことも、彼の「放浪癖」を抑える役割を果たしたと思われます。経済資料協議会は、加盟校の減少や、『経済学文献季報』の編集実務を担う主要校の司書職の減員などで、季報の刊行継続が困難となっていました。是枝洋は、この難問山積の機関の責任者に選ばれたのです。この事実は、彼が司書仲間から、大きな信頼を寄せられていたことを裏付けています。

パソコン導入

多摩キャンパスへ移転直前の1984年7月、大原研究所は初めてパソコンを購入しました。NEC9801シリーズの第2代にあたる「9801E」で、本体の他にディスクドライブ、モニター、プリンターを含めれば、一式60万円もしました。8ビットから16ビット機になったばかりの非力なマシンで、それも1台だけでしたが、これは研究所の将来を大きく変える出発点となりました。この年以降、研究所はパソコンを年々増やして行きますが、これを主導したのは、他ならぬ是枝洋です。彼は、1970年代に、パンチカードを使った図書検索システムを構想していたほどですから、すぐパソコンにのめり込みました。彼は大学から借金をして、自宅にも1セットを購入、パソコンの研究を始めたのです。当時、データベースと言えば、1000万円もするオフィス・コンピュータを使うしかない時代でした。しかし、是枝はパソコンによる文献データベースの構築を計画し、着々とその構想を実現して行きました。研究所が新たに購入する機種を選定、設置、LANの構築、データベース用ソフトウェアの比較検討など、パソコン関係のすべての実務を担ったのは、是枝洋でした。彼はもはや「ライブラリアン」の枠を大きく超え、研究所業務全般のデジタル化を推進したのです。パソコンの性能が短期間で著しく進歩したことにも助けられ、90年代前半には、オフコンにも劣らぬ、データベース・システムを作り上げました。今では、どの職場でも、パソコンを使用することは、ごく普通の風景です。しかし、1980～90年代では、大原社研のPCデジタル化は例外的に進んでいました。研究所が、毎年、各種の研究助成金を獲得できたのも、「パソコンによるデータベース構築」が、当時としては先進的なテーマだったからです。パソコンは、データベース作成だけでなく、研究所の日常業務全般を変えました。年鑑や大年表、研究所雑誌の編集作業も、PC使用によって、飛躍的に効率化されました。

1992年3月、是枝洋は研究所を選択定年によって退職しました。しかし、その後も嘱託として、データベースの拡充につとめ、1998年1月には、《リプロ電子工房》を設立して、大原社会問題研究所のデータベースの充実に関わり続けたのでした。

高尾紅葉台に定住

研究所の多摩移転に先立つ1983年7月、是枝夫妻は、キャンパスにほど近い、八王子市狭間町の紅葉台団地に転居しました。麻布白金猿町の下宿から数えて6回目の移転です。しかし、紅葉台移転後は、長年の「放浪癖」とは縁を切り、英子夫人と2人、狭間町に住み続け、同地で生涯を終えました。

ここで、英子夫人について簡単に紹介しておきます。1973年に毎日放送東京支社を退職した彼女は、日本図書館協会事業部に所属し、諸大学図書館から委託された洋書の整理をするかたわら、法政大学通信教育部の文学部史学科で学び、1980年に卒業しました。卒業論文のテーマは「大正デモクラシー期の図書館運動」で、長野県伊那郡上郷村の青年会の若者たちによる図書館建設運動を描いたものでした。この論文は指導教授に高く評価され、歴史科学協議会の機関誌『歴史評論』

に掲載され、さらには、『知恵の樹を育てる——信州上郷図書館物語』（1983年、大月書店）として刊行されました。こうした業績が評価され、1986年、専修大学文学部非常勤講師となり、1994年まで、図書館史と図書館通論の2科目を担当しました。また地域では紅葉台団地自治会の「八王子南道路対策委員会」の委員として活発に活動し、また月1回自宅を開放して児童文庫を開いていました。

ところが彼女は、1999年頃から肩こりや不眠、めまい、吐き気など、体調不良を訴えるようになります。2000年代に入ると、もの忘れ症状の悪化を自覚し、各種のサプリメントを試みたり、「頭がよみがえる算数練習帳」に取り組むなど、記憶力回復の努力を続けています。しかし、このもの忘れは、単なる老化によるものではなく、アルツハイマー型認知症の先駆症状でした。2007年頃からは、出先で迷子になったり、約束の時間に待ち合わせ場所に現れなくなるなど病状は進みました。さらに歩行中の転倒も頻発するようになります。こうした夫人の症状悪化を懸念した洋は、全国的に専門医を探し出し、6箇所もの病院に連れて行って受診させ、アートセラピーや音楽セラピー、作業療法など様々な治療法を試みています。しかし残念ながら、あまり効果はあがらず、2013年には介護認定を受け、要介護1の判定。2015年には要介護3となりました。2018年1月には、インフルエンザによる高熱のため入院、2月13日に一時退院、しかし翌朝呼吸困難となり逝去されました。是枝洋の晩年、とりわけ最後の十数年は、妻の介護に心を砕いた日々でした。逝去後、洋は英子の未完の自伝を追補し、闘病記を加えた『かわらぬ心をいだいて——是枝英子自伝、闘病記』を一気にまとめ、一周忌に刊行しています。

人となり

ほかにも、語るべきことは多いのですが、すでに与えられた紙幅を超えており、簡単に述べざるを得ません。彼は、私がこれまで会った人の中で、他に類をみない、いわば「稀れ人」でした。いつも微笑みを浮かべ、穏やかに人と接し、人と争う姿を見たことはありません。しかし、社会的な不正、不公正に対しては、ハッキリと反対を表明する人でした。その一例は、高尾山にトンネルを掘る圏央道工事に対するもので、是枝夫妻は反対運動の先頭に立っています。彼は、人の役に立つことを常に考える人で、夫人の闘病記をまとめたのも、アルツハイマー型認知症の病人やその家族の参考になればという思いがあったからでした。私が同書の感想をメールした折、彼は次のような返信をくれました。

「この本を書いてから、やはり認知症の介護には様々な情報が必要と思いついて、まわりの方と話し合ってきました。地域で家族の会みたいなのをつくれないうことになり、さしあたり情報交換会的なものをやろうという段取りになりました。はじめの試みとして、『あんしん相談センター』から講師を招いて、介護保険の活用法ということで話をしてもらいました。そして、新聞をだして情報交換をしようという計画をたて、テスト版をつくって見たところ、読者になるという人が17人もありました。そういうわけで、にわかには忙しくなって来たところです。私も歳なので、自分で旗はふれませんが、世話する人がでてくれば、自宅を介護

者、支援者、当事者のたまり場として活用したいと思っています。実際、認知症介護は、介護者も病気にすると言われていた位なので、大変なことだと思います。すこしでも息抜きができればいいと思っています。」

仕事以外で、彼が愛好したものの第一は、合唱でした。在職中は職員の合唱団に参加し、地域でも、絹の道合唱団、八王子ぞうれっしゃ合唱団、年1回、オーケストラ付きでモーツァルトのレクイエムやヘンデル・メサイア、ビバルディ・グローリアなどの大曲を歌うアンサンブルJ合唱団などで、毎週1回以上、夫妻で合唱に参加していました。倒れる直前まで、合唱団でロシア民謡を歌っていたのですから、幸せな最期だったと言うべきでしょう。他の趣味については、音楽鑑賞のほか、知るところは少ないのですが、マウンテンバイクは、その一つだったと思います。英子夫人が『知恵の樹を育てる』を完成させるため長野県の飯田に滞在していた時、「私も一週間ほど飯田市に泊まり、彼女が聞き取りにしている間周辺をサイクリングして遊んでいた」（『かわらぬ心をいだいて』126頁）と記しています。その後のことでしたが、彼が数ヶ月間休職したことがあります。その原因は、伊豆のマウンテンバイク専用のサーキットで転倒し、大怪我をしたことでした。

是枝洋は、高い知性と強い向学心をもちながら、幼少期に父を亡くしたため、家計は貧しく、正規の学校教育を受ける機会がありませんでした。通信教育と図書館で自学自習するなかで、図書館司書を自らの天職と考えるようになり、文部省図書館職員養成所で学び、生涯司書としての力量を磨き続けました。1965年9月、法政大学大原社会問題研究所の図書係に採用され、戦後の大原研究所図書館の基礎を作り上げ、さらに所蔵図書資料のデータベース化を推進し、パソコンによる研究所業務のデジタル化を中心的に担いました。生涯、自ら課題を発見し、図書によって回答を見出す、自学自習の人でした。

（にむら・かずお 法政大学名誉教授、法政大学大原社会問題研究所名誉研究員）